

佳作

## アオハル

広島県広島県立広島叡智学園中学校三年 井戸 彩名

「これってアオハルだよねー。」  
「それな。」

七月上旬の部活終わり、アイスクリームの自販機前で仲間と声を掛け合う。ごぼうびアイスの味は格別。実はバレーの練習中に上手くスパイクが決まったらアイスを食べに行こうと約束していたのだ。

私は中学から地元の香川を離れ、広島の高島にある全寮制中学に入学した。そして、部活体験が一番楽しかったというシンプルな理由で大した運動経験もないのにバレー部に入部した。コロナ禍で外出制限ばかりの二年間、私は時間があれば体育館でバレーボールを追いかけた。下手なのに、夢中。だから週二回の練習日が愛おしくて、火曜と土曜のたびに心躍らせ、終わるたびに悲しくなるのだった。バレー中毒になっていく私をみんなが認めてくれたのか

キャプテンにもなった。

中三、五月の連休。地元にある中学校と練習試合ができることになった。創部三年目の初試合。バレーに集中したくて香川に戻らず、練習の日々。初めてのユニフォーム、初めての試合。結果は惨敗。でも、とにかく一瞬一瞬がキラキラしていて、負けただけど清々しくて、精一杯やったぞ、と悔いはなかった。課題はたくさん見つかったけど、まだこんなに自分には感激できることがあるんだと嬉しくもあった。スポーツの力ってスゴイ。今まで一緒に練習を重ねてきた仲間と先輩方、この試合に出させてくれた顧問の先生、対戦相手の方、みんなにありがとうと伝えたかった。この学校に来て、バレーにも出会えて、私は幸せ者だ。

七月二十七日。初めて最後となり得る公式戦。コロナで中止になりそうとヒヤヒヤしていたが制限の中、参加できた。会場の立派さにビックリ、周りのチームのレベルの高さにビックリ。でも私たちがらしく泥くさくやり抜いてみせると覚悟していたから、それさえも発奮材料になった。試合中のことは覚えていない。でも、チームメイトが声をかけてくれたこと、声援が大きかったこと、必死だったことはハ

ッキリ記憶している。その声援に、その心に鼓舞されて善戦した試合もあったが、予選リーグ敗退となり引退試合となった。でも、最後までこの瞬間を楽しもうと広場でダンスに興じたり、バス内でワチャワチャしたり。この日が終わってほしくなくて、一秒でも長く、この仲間と居たくて。きっと、この日の一シーン一シーンを何度も思い出すのだと自分で分かっていたから。

私のアオハルは終わった。ん、いや待てよ。こんなにスポーツの力を体感した私がスポーツ科学を勉強するのも良いんじゃない？今はこれも一つの進路として考えている。試合結果だけじゃなくて、あの仲間たちと練習できた何気ない日々こそが尊いのだと気づいたから。バレーという競技と、周りの人に感謝しつつ、最後に一言。

「頑張れば、感動。」